
未来を見据える写輪の瞳

ザッフィー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来を見据える写輪の瞳

【Nコード】

N4371W

【作者名】

ザツフィー

【あらすじ】

カカシ主人公の本編再構成ものです。独自設定などを多分に含む事を了承のうえでお読みください。

一話（前書き）

本来カカシに転生ものを書こうとしてたのですが脳内プロット上、わざわざそうする必要がないことに気付きました。

なのでカカシをやや変更しての原作再構成という形になりました。予定していたものを期待されていたかたは申し訳ありません。

一話

「もう一度言っただけですか？」

「担当上忍をしてもらう。そう言った」

足を肩幅に開き、所詮休めと言われる体勢で目の前の老人……木の葉隠れの里の長、火影の話を聞いていた男、カカシは自分の頭をボリボリとかきながらそう聞き返していた。

「お断りします」

里長からの命だというのにカカシは拒否の意を速攻で返した。それどころか、特Aの任務を終えて疲れている所にそんな話をするんじゃないねえと言わんばかりの不機嫌オーラがにじみ出ている。

そんなカカシの様子を見て取ったのか、火影は一つ大きくため息をつく。

「普通に命じても聞かんことは分かっている。来たのじゃよ、約束の 때가」

「約束の……それではまさか！」

「うむ。あの子が……ナルトが、アカデミーの卒業試験に合格した」

木の葉隠れの里では後進の育成プログラムの一環として現役の上忍は必ず一度以上新人下忍の担当を行うことを義務付けられている。その決まりには暗部や特別上忍等の一部を除き例外は無く、カカシ

にも勿論その義務が課せられる。

だが、このカカシはその任に就くことを拒否し続けていた。本来ならば拒否した所で回避できるものではないのだが、それはカカシの立場が有利に働いた。『木の葉現役最強』。暗部を辞し、上忍として活動することでその実力が白昼に曝されることになって以来、カカシは里内でそう呼ばれるようになっていた。そして、現在里が保有する最高クラスの戦力、というのは上層部も否定できるものはなかったのだ。

その当時丁度大規模な高ランク任務があったこともあり、一端はカカシの担当上忍の話は流れることになった。だが、決まりをそのまま放っておくわけにもいかない。火影が直接カカシと話し合った結果。カカシの側から一つの折衷案が出された。それが、『担当する下忍を、此方で指定させて欲しい』というものだった。今まであまり前例のないことだが、それで了承するのなら、と何とかカカシに担当上忍了承の言を取り付けたのだ。

「ほれ、これが班員の資料じゃ。顔合わせの予定等が書かれたものも一緒にしてある」

「分かりました。それでは、失礼します」

踵を返し部屋を後にするカカシを火影は静かに見送った。

「さて、これが吉と出るといいが……」

はたけカカシ。現役最強と里内で呼ばれ、他国では写輪眼のカカシ等の異名で恐れられる男だ。その実力は、火影から見てもかなりのものだと言える。

「ワシも、そろそろ引退したいんじゃないかろう」

現在、火影の座についているこの老人は三代目。四代目が若くして亡くなったための急きよ隠居生活から引きずり出された身である。既に一度引退した身であることもさることながら、年であることも相まって早くこの座を譲りたいというのが本音だ。

だがそれも、譲る相手がいないのでは仕方がない。もし、あえて次の火影候補を上げるとするならば真つ先に上がるのは二人。三代目火影の直弟子である二名だろう。だが、その両名は各々里を離れているうえに要請した所で引き受けるかもあやしい所だ。

では、他の者でというと考えられる最有力候補は一人。それがはたけカカシだ。

「忍としての実力も、里を運営するための知能も充分。だが、足りん」

これまで火影を担ってきたものは皆素晴らしい人であり忍であった。その者達と比べると、カカシは決定的に欠けているものがある。力でもなければ頭脳でもない、上手く言葉にすることはできないが、それでも確信していた。

「古き友の二人目が死に、カカシの歩みは遅くなった。そして、師が死にカカシは止まってしまった。ミナト……どうか、見守ってやってくれ」

今は亡き四代目火影の顔を想い受かべ、火影は静かに祈りをささげた。

火影の執務室での一件から数日。ついにアカデミー卒業生と担当上忍の顔合わせの日がやってきた。

「……いくか」

里に居る時の日課である慰霊碑への参拝を切り上げ、カカシはアカデミーへとその足を向ける。

「先生、ついにあの時の約束を果たす時が来ましたよ」

里を救うために若くして逝った師。その忘れ形見を立派な忍びにする。それが今、カカシにある唯一と目撃していた。いい目標だった。

所変わってアカデミーの一角。カカシは担当する三人の子供が待つ教室へ向かっていた。頭の中では火影に渡された資料に書かれた情報をもう一度再確認していた。

一人目、うずまきナルト

規制がしかれており今の子等は知らないが、その正体は九尾を封じられた人柱力にして四代目火影の實の息子。アカデミーでの成績ははつきり言って悪い。また、悪戯を頻繁に起こし教師の悩みの種しかし、ミスキ反乱の際は持ちだした禁術書にかかれていた多重影分身を用いてこれを撃退。内に秘められた才能の片鱗を見せた。

二人目、うちはサスケ

木の葉のエリート一族、うちはの生き残り。アカデミーでの成績はダントツのトップ。現時点で忍術、体術、幻術どれにおいても非

常に高いレベルをマークしており将来に期待がかかる。

三人目、 春野サクラ

上記二人が特別な立ち位置にいるのにたいして普通の少女である。また、両親も一般人なせいかな身体能力、チャクラ量はやや劣る。しかし、それに反して頭脳面では非常に優秀であり、また幻術に関しては高い水準を持っている。チャクラコントロールが得意。

(ナルトは俺が指名した。サスケは、まあ写輪眼の開眼を見越してだろう。サクラは、人数合わせて所か)

まさかうちのは生き残りまでついてくるとは思っていなかった力カシは思わずため息をつく。血継限界を持つ者の重要さは理解している。それもうちはともなればかなりのものだ。面倒を押しつけられたか、とここにはいない里長に悪態をつく。そうしている内に、目的の教室へと辿り着く。

「さて、行こうかね」

力カシはドアに手をかけ、ゆっくりとドアを開け放った。

一話（後書き）

まだプロットがしっかり作成できてないので更新は不安定になるか
と思います。

誤字脱字などを見つけたら報告してくださいとありがたいです。

一話

「さて、とりあえず自己紹介からだ」

教室のドアに仕掛けられた黒板消しのトラップを華麗に回避したカカシは下忍三人を伴いアカデミーのとある建物の屋上に移動していた。

「まずは俺が先にしよう。名前ははたけカカシ。お前たちの担当上忍だ。好きなものはとくになく、嫌いなものもとくはない」

結局名前程度しか分かることがなかった自己紹介に下忍達はいぶかしげな顔をしている。だが、これは言ってしまった癖のようなものだ。相手に余計な情報を与えない。元暗部であるカカシは無意識にこれを行っているのだ。

「んじゃ、右から順によろしく」

「名前はうずまきナルト。好きなものはカップラーメン！ 嫌いなものはお湯を入れてからの三分間。将来の夢は火影になること！ そももって里の奴らを見返してやるんだってばよ」

カカシの自己紹介に不満を持ちながらも元気に自己紹介を始めるナルトを見て、カカシは師四代目火影を思い返していた。

（似ている……先生にそっくりだ）

太陽の輝きを想わせる金の髪に透き通る大空の様な蒼い瞳。疑うまでもない。ナルトは確かに、波風ミナトの血を受け継いでいる。

「先生？」

「っと、すまん。それじゃあ次」

自己紹介が終わったというのに黙りこくったままだった力カシの顔を不思議そうにのぞきこんでくるナルトをあしらいながら、次の子へと促す。

(先生、この子は必ずこの俺が……)

長くに渡り冷え切っていた力カシの心に、僅かな熱が、生まれた。

「よし、全員そろってるな」

翌日、下忍第七班の面々は里内にある演習場の一つに集まっていた。その目的はサバイバル演習、と言う名の真の下忍認定試験を行うことだ。尤も、その事はナルト達下忍は知らないが。

「先生、演習すんのはいいけど、一体なにするんだってば？」

期待に満ちたナルトの目が力カシへと向けられる。恐らく下忍になったことでアカデミーとは違う、更に忍びらしい者を期待しているのだろう。そして、その期待はかなえられる。何背、演習の内容とは……

「ああ、今からお前達三人にはこれを俺から奪い取ってもらおう」
カカシの手の中で揺れる一つの鈴。上忍はたけカカシVS下忍三人による鈴取り勝負が始まる。

「さて、どうくるかな」

あの後、カカシはルールを説明し、その場を離れた。ルールは少なく1・鈴は基本的に腰の見える位置につける。2・下忍三人は協力してよい。3・カカシは手裏剣、クナイを使わない。と、この程度だ。

「ま、三人で協力すればそれなりにやれるだろう」

サクラとサスケで作戦を立案。ナルトの影分身を上手く使えば短時間でもそれなりの策が出来る筈だ。カカシはこのチームに期待していた。ナルトもサスケも負けず嫌いに見えだし、サクラも二人を諫めながらも触発されて伸びる。そう思った。だが、そうは問屋がおろさなかった。

「さて、お前達何か弁明はあるか？」

開始からわずか40分。下忍三人は縄で縛られその場に転がされていた。何故こうも早く決着がついたのか、簡単に言うなら、皆子供過ぎたのだ。

二人は格下、足手まといとしたサスケ。それに反発したナルト。何とか取りまとめようとしたもののドベのナルトが足手まといになりそうなことを否定できず、かと言ってサスケにも相手にされず右

往左往していたサクラ。

こうなってしまうえば早々に片がつく。カカシを発見次第真正面から飛びかかってきたナルトを千年殺して悶絶させ。途方に暮れていたサクラを幻術で気絶させる。下忍が作ったにしてはまあまあ、程度の罠に誘い込んだだけで得意げに仕掛けてきたサスケを虫けらの如くあしらった。

「はつきり言う。お前達、忍びとして最低だ」

第七班下忍認定試験、結果。最低評価である。

「お前達、何のためにスリーマンセルを組んでいると思ってる。協力して、任務を達成するためだ。なのにお前たちは……いいか？忍にとつてルールや決まりは最重要だ。それを破る者はクズ呼ばわりされる。だが、仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズだ！」

今まで余り威厳の見られなかったカカシの、熱のこもった声にナルト達は眼を見開いて聞き入る。仲間を大切にしない奴はクズ。それは、三人の胸に深く刻まれた。仲間がいなかったナルト、仲間を失ってしまったサスケ、仲間に囲まれていたサクラ。違いはあれど、仲間の重要さ、尊さは理解できる。

「三十分後にもう一度開始だ。三人で、よく話し合え」

三人に背を向けると、カカシはゆっくりとその場を立ち去った。遠ざかっていく背中を見えなくなるまで見送っていた下忍三人はそろって顔を見合わせ、気まずそうに顔を反らした。

「時間が無い。策を立てるぞ」

だが、そのまま動かないのでは無駄に時間を消費するだけ。沈黙を最初に破ったのはサスケだった。そして、サクラもそれに続く。

「そうね。とりあえず、使える忍術なんかの確認をしましょ。そうでないとなんて到底立てられないわ」

「次こそ、カカシ先生から鈴をとるってばよ！」

まだ少しギクシャクはしているものの、三人はチームとしての第一歩を踏み出した。それを隠れて眺めていたカカシは満足そうに頷いた。

「お前たちなら、立派な忍になれるさ」

かつての自分のチームメイトを思いだしながら、カカシは試験再開の静かに待った。

ちなみに、第七班は見事鈴を奪い取った。鈴取り終了後、これが真の下忍認定試験だったと聞かされた三人が安堵の余りその場に座り込んでしまったのは余談である。

二話（後書き）

ウチのカカシはややナルトに固執している所があります。
とりあえず、これでナルト達のはれて下忍に。

そして始まる波の国編。バトルが始まるから大変だ。

三話（前書き）

というわけで波の国編突入。

それにしても、土曜も朝から大学で、日曜も友人らとフットサルを再開してあんまりのんびり寝てられない。
やはり、授業中に寝るしかないのか！？

三話

「ねえ先生つてば、いつまで俺達こんな任務しなやかやいけないんだつてばよ」

ナルトがそんな言葉を漏らしたのは、迷子の猫を探すというDランク任務を終え、新たな任務を言い渡されるその時であった。

「んー、そう言われてもなあ」

Dランク任務。主に新人下忍に言い渡される任務だが、任務とは名ばかりの雑用が殆どを占めている。はつきり言つて、忍びがやらなくていいことばかりだ。だが、里としては馬鹿に出来ないものがあるのだ。

その例として、ナルト達が先ほどこなした迷い猫の搜索は火の国のお偉いさんの婦人からの依頼だ。木の葉にとって火の国とは大手中の大手の取引相手。たとえくだらない任務であろうと、こういった日ごろの積み重ねから信頼を得るのはとても大切なことなのだ。

「私も、さすがに……」

「同感だ」

「いや、言いたいことは分かるんだが……」

Dランク任務の大切さはカカシも知っている。だが、ここ最近はその頻度が以上だ。さすがに、修行が出来ないほどに任務を押しつけられているのには、カカシも不満を抱かずにはいられない。

「と、言うわけでした。修行をするための休暇、もしくはわくらんク任務を頂けないかと」

思い立ったが吉日。今日は火影が依頼伝達の席にいたいことを思い出したカカシは迷い猫搜索任務の達成報告のついでに、直談判に出ることにした。カカシの後ろではナルトら下忍がもうDランクは嫌だと必死に目で訴えかけている。

「何がと、言うわけじゃ。お前さんたちの次の任務は、ほれ、この通り。既に決まっております」

Dと大きく書かれた書類を振って見せつける火影。それを見たナルト達は一齐に顔を落としていた。また、雑用をするしかないのかナルトも、サクラも、サスケもそう思った。だが、忘れてはならない。彼らの担当上忍ははたけカカシ。木の葉現役最強と名高い、超一流の忍びである。そんな彼が、なんの手札もなしにこんなことを言うはずがない。

「火影様、お言葉ですが……」

「何じゃ？」

マスクで見えないものの、火影は確かにカカシがニヤリと笑みを浮かべたことを感じ取った。そのことに眉をしかめながら、カカシに続きを促す。

「現在、私達第七班がこなしたDランク任務の数は八つになります。ですが、他の新人下忍二班はどうでしょうか？」

そこまで聞いて、火影はカカシが何と言わんとしているかを察し

た。そして、それは正当性のあるものであると。

「他の二班がこなした任務の数は四と三。明らかに我々より少ない」

「う、うむ」

本来、任務は均等に分配されることになっている。特A任務ともなればそもそもこなせる人材が限られてくるため中々裁量の難しい所ではあるのだが。だが、ナルト達が今行っているのはDランク任務。誰にでもこなせる雑用だ。なればこそ難しく考えずに均等に任務を与えられるはずなのだ。

「さて、私達が一日に複数の任務をこなしているというのに、他の班は何をしているのやら」

「ええい、分かった！ お前達には別の任務、Cランク任務を行ってもらおう！」

それを聞いたカカシは再び、ニヤリとマスクの下で笑みを浮かべた。

「任務の内容じゃが、ある人物の護衛を行ってもらおう。期間は件の人物が故郷にて作成中の橋が完成するまで。作業を妨害してくるギャングから守って欲しい、とのことじゃ」

護衛というやりがいのありそうな任務になるとは眼を輝かせ、サスケも僅かだが笑みを浮かべている。そしてサクラは、結構長い任

務になりそうねー、着替えとかの準備しないとー、と一人思考していた。

カカシもギャング程度が相手ならば今の三人でも早々遅れはとるまいと判断し。いい経験になるだろうとその任務を受諾した。

「うむ。それでは、護衛対象の方に早速会ってもらおう。タズナ殿、どうぞこちらへ」

そう火影に促されてカカシ達の前に姿を現したのは長身で白い髪、白い髭の老人だ。老人とはいっても足取りはしっかりしており、まだまだ若さがみなぎっている感じた。

「ワシが橋づくりの名人タズナ。依頼人じゃ。それにしても、こんなガキばかりで大丈夫なのか？」

「ハハハ、上忍の私がついてますから安心して下さい」

ガキ扱いされてタズナにつっかかろうとしたナルトの首裏を掴み上げ、カカシは乾いた笑い声を上げた。

「それじゃあ、出発するぞ」

その後、第七班のメンツは一端解散。その日の残りを準備時間とし、明朝、門の前に集合とした。そして、出発の時間が訪れたのである。

一行は無理のないやや遅めのペースで歩き続ける。目的地である

タズナの故郷、波の国へはそれなりに距離がある。到着までには何度か野宿をするだろうし、疲労を抑えるべきだという考えの元である。

「そういえば、カカシ先生。私達がこれから行く波の国って、忍者はいるの？」

「いや、波の国には忍はいない。木の葉、砂、霧、岩、雲の忍五大国を筆頭に数多くの忍里が存在しているが、波の国忍里がないだ」

「へえ〜」

サクラはアカデミー座学トップだったはじめなのに、こんなことも知らないのか？ アカデミーの授業内容を見直した方がいいんじゃないかと柄にもなく今の時代を憂っていたカカシだが、道端にある一つの”水たまり”を発見し、ほんのわずかだが目を細めた。

(……これは、面倒なことになりそうだ)

小さくため息をつきながら、来る戦いに備えカカシは気を引き締めた。

三話（後書き）

いなくなったイルカ先生。ごめんね。めんどゲフンゲフン

相変わらず短いですが、どうかお付き合いください。

四話（前書き）

昨日は釣りに行ってきて疲れたのでまたまた一日遅れです。
近くの川（海に向けて徐々に開けてつる感じの所）でやってたの
ですが、セイゴとハゼが釣れました。
釣った魚は今夜の晩御飯になりましたよ

四話

「さて、道中ただあるいているだけじゃもったいない。お前達に一つ修行を課そう」

「ええ！？ 歩きながら修行すんの！？」

この任務が面倒になりそうなことを察したカカシは少しでもこの状況を利用しようと目論む。自身の負担は増えるが、やはり成長するには実戦が最適なのだ。

「なに、そうむずかしいことじゃない。お前達には違和感を探してもらおう」

「違和感？」

首を傾げたサクラだけではなく全員に一つ一つカカシは説明していく。

「今回の任務は護衛だ。つまり、俺達は狙われる側ということだ。基本的には襲ってきた敵を迎え撃つわけだが、此方の隙をうかがう敵を見つけ、倒すこともあるかもしれない。その隠れた敵を探すには？」

「違和感を探せ、ってことか」

「その通りだサスケ。何気ない光景に潜む僅かな違和感。それを見つけられるかが非常に大事だ」

三人がちゃんと己の話を理解している事を確認しながら、カカシは歩く。少しずつ近づくと気配を察知している事をおくびにも出さずに。

「今、ここまで来る中にも凄くおかしなものがあった。よく思いだして見る」

隠れていた者の気配が変わる。今の会話を聞いて、カカシが自分たちの存在に気付いていたことを知ったのだろう。時間が経つにつれ、敵意……いや、殺気が高まっていくのをカカシは感じ取る。

「違和感……違和感……」

「何かあったかしら？」

「チツ、分かんねえ」

三人とも必死に思いだそうとしているが、中々難しい様だ。これは、奴さんが仕掛けてくるのが先か？ とカカシが思った所で、ナルトが目を見開き口を開いた。

「あー！ そういえば、水たまりがあったってばよ！」

「水たまり？」

「そのどこがおかしいのよ？」

「ここ最近雨なんてふってなかったから普通水たまりなんてないはずだって！」

（カカシを殺るような奴等を、俺らが相手に出来るか？ いや、やらなきゃやられるだけだ！）

心は熱く、頭は冷静に。サスケは先手を取るべく、最も結びなれた印を最速で組んでいく。馬の印、そして寅の印へと続き、術は成る。

火遁・豪火球の術！

サスケの口から巨大な火球が放たれる。火遁の基礎忍術、豪火球の術だ。基礎とはいえ、下忍がそう簡単に会得できる忍術ではないのだが、サスケは火遁に相性の良い血筋と、その類まれなる才によってそれを可能としていた。

「ほう」

しかし、巨大な火球とはいっても外と言う広い空間では大した脅威ではない。鋭い爪のついた手甲を装備した敵の忍びは、左右に分かれることで難なくその術を交わす。

「そこおっ！」

だが、そんなことはサスケ達とて先刻承知。始めから豪火球は敵二人を分断させるためのものだった。

そこへ、サクラが投擲した手裏剣が襲いかかる。

「甘い甘い」

しかし、何の工夫もなく放たれたそれは容易く手甲によって弾かれる。だが、彼らの攻撃はまだ、終わらない。

「甘いのは、お前だつてばよ！」

手甲によって弾かれた手裏剣、その一つがボフィンという音をたててナルトへと姿を変える。この予想外の出来ごとに、体を硬直させた忍びはナルトの放った蹴りを無防備な顎に受けることになる。

「っしあ！　まずは一人！」

かねてより仲間で練っていた策の一つが成功したことदैいつもの調子を取り戻したのか、ナルトの顔にはもう怯えの表情は無い。それどころか、もう一人も俺が倒してやると勇んでサスケへの救援に向かった。

ほどなくして、ナルトの加勢を受けたサスケは残ったもう一人の忍びを打倒する。

戦闘が終わり、一段落した所でカカシの死体だと思っていた者が実は変わり身用の丸太で、血だと思つたものはトマトジュースだったと知つた彼らが大きいため息をついて脱力したのは仕方ないことだろう。

ちなみに、姿を現したカカシは下忍達によつて説教をくらつた。

四話（後書き）

この段階でナルト達はそれなりに戦えたりします。ただ、技術的には原作とさして変わりません。心構えが少しできてるって所でしょうか。

五話（前書き）

一週間休んだにも関わらず凄く短いうえに変な所で切ってしまいました。申し訳ないです。

五話

(あーあ、やだねえ)

カカシは大きなため息を一つ零すと、先ほどのやり取りを思い返した。

「さて、タズナさん。一つお聞きしなければいけないことがあります」

下忍の説教からようやく抜け出せたカカシは先ほどまでとは打って変わって真面目な面持ちでタズナを見据える。カカシの視線の先にあるタズナの表情は硬い。

「任務の内容は橋の建設を邪魔するギャングからの護衛だったはずです。なればこそ、この任務はCランクであり、我々に回ってきた。しかし先ほどの忍達……彼らの狙いは明らかに貴方だった。

忍が出てくるとなれば最低でもBランクになっているはずですが……」

カカシの声音には虚偽は許さないという威圧が込められていた。それはタズナにも理解できたのか、数秒の沈黙の後、タズナは事の真相を明かした。

要約すると、タズナは敵……ガトーカンパニーが忍を雇っている事を知っていた。しかし、波の国は大名ですら金を持っておらず、とてもではないが高額のBランク任務を頼むことが出来なかったとのことだ。

「なるほど、そういうことですか」

依頼の内容を偽るなど木の葉からしてみれば忌々しいことこのうえないが、逆の言えば木の葉は一般人の偽装すら見破れなかったということだ。正直言つて、その事実是不味い。ただえさえ、木の葉は他里から平和ボケしていると揶揄されているのだ。こんなことが知られればたまったものではない。

「とりあえず、ご自宅までは護衛を続行します。ただし、その後については里の判断を仰ぐこととなります」

「元はと言えばワシが悪いんじゃ。どうなろうと礼こそすれど文句は言わんよ」

かくして、カカシ達はタズナの護衛を続行することになったのだ。つた。

が、問題はここからだ。先ほどナルト達が撃破した忍びは霧隠れの忍びで立ち位置としては中忍。一人前の忍者と言つて過言ではない者たちである。しかも、彼等はその中でもそこそこに名が通っている腕ききだ。

とはいえ、上忍でもトツプクラスの実力を持つカカシの敵ではない。だが、彼らの後ろ。彼らを最初の当て石に使う様な人物がそう簡単に御せるだろうか。少なくとも上忍クラスであろう敵の親玉を思つと、カカシはため息をつくことしかできないでいた。

そして、その時が訪れる。

「そこだあ！！」

ナルトの突然の手裏剣の投擲。手裏剣が飛来した場所は間違いない、カカシが何ものかの気配を感じたその場所であった。茂みをかき分けその場所を見る。すると、そこに居たのは頭頂部に手裏剣の刺さったウサギが一匹。だが、そのウサギがおかしいことに真っ先にカカシが、少し遅れて聡明なサクラが気付いた。

「せ、先生！ そのウサギって！？」

「サクラ。お前の思っている通り、コイツは変わり身様に育てられたウサギだ。つまり、だ。
来るぞ！」

ブオンブオンと手裏剣など比ではないほどの風切り音を放ち、人の身の丈ほどもある刃がカカシ達に襲いかかった。

「しゃがめ！」

カカシの指示に下忍達は考える間もなくその身を地面へと近づける。カカシは唯一状況を理解できていないタツナを強引に地面へと押し倒す。

カカシ達の頭上を通った巨大な刃はやがて一本の気に刺さり、その動きを止める。そして、その刃の上に降り立つ影が一つ。

「写輪眼のカカシとお見受けする」

「これはこれは、霧隠れの鬼人”桃地 再不斬”君じゃないですか」

霧の忍刀七人衆が一人、桃地 再不斬。予想外の大物の登場に、
カカシの頬を一滴の汗が流れた。

五話（後書き）

つか、れたー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4371w/>

未来を見据える写輪の瞳

2011年11月8日02時09分発行